

1 学生が学ぶ環境の充実

- 単位互換について、以前は勢いがあったが、学内で完結できる環境が整ってきたので、利用する機会は減ってきた。学生にどうアピールするかは課題であるが、キャンパス内でフォローできない科目については積極的に広報していきたい。
- 立地の面では、キャンパスプラザ京都とも近いのだが、学外に出ない学生が多く、単位互換制度などの魅力を伝えるのに苦労している。
- 単位互換について、短大ということで1年生は学内の科目で時間割が埋まってしまう。単位互換まで考えが及ばない学生が多いのではないかと。夏期集中系の科目であれば目が行くかもしれない。
- 単位互換は座学よりもフィールドワークで他大学と交流できるような形の方が良い。
- 障害のある学生への対応は最終的には個別支援になるため、コンソの取組は事例の共有という面で役立つという印象。
- 障害のある学生の支援について、各大学でそれぞれ取り組みはあるが、学生はまず自分の大学の窓口をたたくと思う。大学コンソーシアム京都と自大学の取り組みで重なるような部分が出たときに、どのように学生に周知していくのかよく迷う。
- 発達障害については他大学と同様に苦労している。情報共有という面では大学コンソーシアム京都に期待したい。
- 障害のある学生の対応については、色々な大学と相談できる機会があまりないので、そのような場があればうれしい。
- 障害のある学生の対応について、同じ仲間として学生が自主的に動いてほしい。例えば大学コンソーシアム京都から何人か来てもらい、学生たちに実感・刺激を与えることができれば、あとは学内で発展させていけるかもしれない。
- FDは学内でも取り組んでいるが大学規模的に限界はある。中規模大学の弱点は人材育成なので、支援をお願いしたい。
- 大学コンソーシアム京都には、大学では実施できない、社会的な視点でのSDの捉え方や大学職員に求められるものなどを引き続き伝えてほしい。
- SDの義務化で求められるのは大学のガバナンスに直結する内容なので、大学コンソーシアム京都ではなく各大学が自前で何とかしなければいけないものではないか。今大学コンソーシアム京都で実施されている研修は従前のSDの延長にあるもので、これは今のやり方で良いのだと思う。
- SD義務化の中、自前で研修制度を整えるのが難しいので、単発系、連続系をバランスよく組み合わせる展開してほしい。
- 若い教員が増えたが、学内で研修する力はないので、新任教員向けの内容で、他大学の方と交流できるようなプログラムがあると良いと思う。
- 芸術系の大学などと特色のある連携ができればありがたいが、特定の大学で音頭を取るのには難しいので、そのような点は大学コンソーシアム京都にお願いしたい。
- 1大学では限界があることとして、講師を招いての講演がある。大学コンソーシアム京都で公開する形でできないか。
- 新入生への危険ドラッグや飲酒等に対するの注意喚起は大学で行っているが、文字ではなかなか読んでくれないという実態もあり、どのように定着させるかは課題。
- キャンパスプラザ京都は立地が良くアクセスしやすいので、大学や学部・キャンパスを超えて、学生同士がプロジェクト形式で取り組む環境がもっと増えれば良い。
- 住環境の問題について、「礼金」の概念が他地域の方には伝わらないようだ。もっと学生が住居を選びやすいような仕組みを作ることができれば良いのではないかと。

2 大学・学生の国際化の促進

- 交換留学生を呼ぶためには宿舎を大学が用意するのが前提になり、各大学共通の課題。留学生と日本人を交えて学ばせる環境が必要だと感じており、寮で同じ環境で暮らしながら交流を深めることも重要である。各大学が個別で寮の確保に取り組んでいるが、大学の垣根を越えて横の連携が取れればよい。
- 留学生の住まいについては各大学で共通の課題だと思うが、留学生と日本人学生の混住型にするかどうかなど、判断が各大学のポリシーによる部分もある。各大学に共通で発生する書類の手間の簡素化などであれば、大学コンソーシアム京都で対策できるのではないかと。
- 留学生のフォローを充実させて、安全・安心な住居を提供していきたい。
- 寮をどこに作るかというのは問題で、一般的に留学生は交通費の発生を嫌う傾向がある。自転車やミニバイクで移動できる範囲に寮があるのが基本ではあるが、街中でアルバイトがしやすいというのもメリットになる。
- 留学生の受入れについて、寮はあるが古く、改修工事を行っている状態で、部屋の確保が難しいかもしれない。理想は混住型で、自転車でも移動できる範囲で住まいを用意したく、支援いただければ助かる。
- 留学生については、日本語教育の強化や、京都の文化、日本の文化・伝統に触れられるようなコンテンツの魅力を広めていく取組などが必要。
- 留学生は大学院生のみ受け入れている。学部まで広げると考えると、日本語教育の面で対応が必要だが、フォローする体力はないため大学コンソーシアム京都で支援いただければ助かる。
- 受け入れ学生の日本語能力のチェックについては、協定校については信頼があるが、一般の留学生については電話面談にて確認することが多い。日本語能力が多少低かったとしても、大学院生であれば基本個別指導なので何とかできるが、学部生の場合は指導に工夫が必要になる。
- 留学生は国別に固まる傾向が強いため、幅広い交流を促す仕組みも考えていきたい。
- 留学生の受け入れを増やしていくよりも、送り出しに力を入れていきたい。
- 学生の海外派遣について、海外でのインターンシップを充実させたいと考えているがなかなか難しい。京都企業の海外支店や系列など、紹介していただけるとありがたい。
- 学習内容は留学生向けではないため、学内に留学生を増やすのは難しい。
- 総合大学のようなグローバル化の方向性は求めている。どちらかといえば、地域と結びつくような人材の育成を目指している。

3 学生の進路・社会進出の支援

- 1dayのインターンシップなども多くなり、参加しないと選考の土俵に上がれなかったりする。そのような中で、大学コンソーシアム京都のインターンシップはしっかりしたプログラムになっている一方、参加しやすいイメージは持たれないかもしれない。
- 大学としては、せめて3日間ほどあるインターンシップに参加してほしいが、幅広く企業を見たいと思う学生が多くて、1dayは参加しやすく学生に人気がある。
- ワンデイ、ツーデイ型が増えている中で、大学コンソーシアム京都が行っているしっかりした教育プログラムは良い取り組みなので、今後も続けていただきたい。
- ワンデイ型のインターンシップに参加する学生もいるが、企業の中身が見えているかどうかは疑問である。また、インターンシップの時期は大体重なるので、学生からすると参加する企業数は絞らざるを得ない。企業としては、参加学生を増やすためにワンデイ型を導入していると思われる。
- 留学生の就職について、企業側は留学生の採用枠を持っているわけではないので、日本人学生と同じ土俵で選考されることから、日本語教育が大きな課題。
- 日本での就職を希望する留学生は多いが、ニーズが多いところはハードルも高くなりがちである。
- 大学では留学生の出口のケアをしづらいこともあり、留学生の就職支援の取組はありがたい。
- 学生の大手志向・安定志向は根強い。中小企業にどのように意識を向けさせるかは課題であり、早めに中小企業の紹介を行うことでエントリーの幅を広げている。
- BtoB企業に就職させたいという思いがあるが、学生はなかなかそこに目がいかない。
- 学生の京都企業とのマッチングは重要だと考えているが、学生の目をどうやって京都企業に向けるか。学生と京都企業の橋渡しになる取り組みについて、大学コンソーシアム京都または京都市として可能かどうか検討いただきたい。
- 中小企業をマッチングする機会があれば学生が喜ぶと思う。初めはどうしても大企業や数が多い地域に目が行ってしまうので、視野を広げることにもつながる。京都にどのような産業・企業があるのか、学生はあまり認知していないのでは。京都の企業の方を招いての授業などもあるが、意識が就職までいかないとされる。
- 大学で企業の説明会を開くとして、良いマッチングにつながるかわからないため、積極的に取り組みたいと思えない。
- 地域社会への貢献を主としており、入学者の地域も近隣に限られている。そんな中で京都の中小企業などと学生をマッチングさせたいとは思いますが、なかなか難しい。一般的な、まず大企業、続いて中小企業というような就職活動の流れではなく専門的な企業に入社する学生が多い。
- 多くが大企業に就職するが、離職率も高い。再就職するにあたって京都の企業を希望する者は一定数いるかもしれないが、既卒生の就職支援はそれほど手厚く行っていない。
- 東京を目指す学生はほとんどおらず、これまでは下宿生はほとんど京都での就職を希望していた。しかしながら、ここ2年ほどの傾向としてはUターン就職が増えている(特に北陸)。地元の学生は京都で就職している印象がある。
- 以前は先輩、後輩の関係で学生が地元就職の情報を入手していたが、そのあたりは現在では希薄となり、Uターン就職に関する公的な協定という制度が整えられ、そのようなルートでコンタクトをとっていく時代となっている。

4 大学との連携による京都の経済・文化・地域の活性化

- 地域との連携から学生が学ぶにあたり、京都文化のリソースが豊富にあることを発信するきっかけ(DBなど)があれば、教員が活用するかもしれない。
- 企業連携のPBLは今後も展開を広げていきたい。積極的な企業があればぜひ紹介してほしい。
- 教員と地域とをマッチングする仕組みがあったとしても、基本的に教員がもともと持っている繋がりから展開が広がっていくことが多いため、あまり効果的ではないかもしれない。ただ、企業と連携したPBLのマッチングはなかなか難しいので、企業側の需要があるのではないか。
- 正課外の取り組みとして、教員の伝手で細々と取り組んでいる。大学としてそれらをどう動かしていくかは課題である。
- 多くの方と接点を広げていきたく、窓口を作りたいと思う。日常的にコンタクトをとれる環境があれば、展開が広がると思う。ただ、NPOや福祉関係などのつながりは体力勝負なところがあって、現状で手一杯。自治体から連携のアプローチを受けることもあるが、現場の体力的に見送ることもある。
- 学生が何か主体的にやるにあたって、例えば大学院生のような、教員と学部学生の間にも立てるような人材を配置したいと考えるが、徹底しようとすると、プロジェクトが増えるごとに人材の確保の問題が発生する。活動の開拓は行っているが、その後の面でどのようにケアしていくかが課題。
- 課題は、各教員・学生が独自に行っている活動の共有と整理。それから、同じようなことを色々な大学が行っているということで、そのような状況について地域にどのように思われているかも考えたほうが良いのではないかと。
- 地域と関わりのある教員が多いようだが、それぞれ何をしているのか把握しきれていない状態のため、大学として整理していきたいと思っている。
- 授業での活動については、活動範囲は教員が持っているフィールドがメインとなるが、それを組織としてどう広げていくか考えている。「現場に行く」ことを重視し、インターンの必修化なども考えられる。
- 地域連携と国際化は一体的に取り組んでいきたい。例えば、留学生が地域に関わる流れなどを作って、今後も発展させていきたい。
- 地域に関わることに積極的な学生が少ない(打ち破りたいが)。個人単位でボランティアなどはやっているようだが、大学で用意した事業になかなか乗ってこない。
- 学生からの自発的な活動がないわけではないと思うが、基本的にはどこにニーズがあるかわからないので、要望を受けて応じていくスタンスである。
- 地域の方からスポット的な要請はたまにあるが、基本的に継続的な取り組みではない。

5 学生が持つエネルギーをいかした京都力の強化

- 最近の学生は忙しい印象はあるが、低回生時にどのように活動について伝えていくかが重要。特に1回生は期待感をもって大学に来ているので、情報と場を適切に提供していけば更なる大学コンソーシアム事業への参加につながるのではないかと。
- 最近の学生は授業、アルバイトなどで忙しく、課外活動する余裕がなくなっているように感じる。
- 教員から、学生が忙しすぎて課外活動などに本当に参加してこないという話を聞いたことがある。特にアルバイトに行く学生が多いと思うので、有償インターンシップなど、金銭面でのフォローのある取り組みが必要では。
- 学生は18時ごろまでは授業があり、アルバイトもしているので忙しいと思う。しかし、課外活動する時間がないと思われる中で、SNSなどを見ているとボランティア活動など、それなりに動きはある。
- 最近の学生は授業やアルバイトで忙しいということはあるが、潜在的には学外の学びを求めているのではないかと。しかしながら、そういったものを自分で切り開いていく傾向はないと思われる。学生同士のやりとりもスマホのSNSで完結するある種のドライさがある。飲み会も全員揃わない。
- グループで動くことが苦手な学生が増えたのではないかと。また、アルバイトなどで時間に余裕のない学生も増えている。グループ活動が得意な学生と苦手な学生との差が開いてきているのでは。
- 最近の学生は授業にも真面目に出席し、アルバイトなどもしているので、忙しいと思われる。アルバイト、クラブ活動の優先順位が高くなり、大学コンソーシアムの活動に参加する時間があまりないのかもしれない。
- 大学の中だけで関係が閉じてしまっている傾向があり、他流試合のような、学生が切磋琢磨できるきっかけをもっと提供できれば良いと感じる。
- 時間割について、課外活動ができないほどカツカツというわけではないと思う。きっかけさえあれば課外活動にも参加するのではないかと。
- インターカレッジの活動は、昔は学生が自由に行っていたと思うが、最近はお膳立てが必要になった。遠方から通っている学生は家・大学の往復をするのみで、その間のことに目がいっていないというか、広がりをもとうとする意識が持てていないように思う。
- 短大では学生同士の繋がりがかなり強くなるため、中学や高校のような雰囲気になって、外に目がいかない。
- キャンパスプラザ京都の施設については、大規模な大学は自前で事足りている印象があるため、自前で対応できない大学を軸に支援してはどうか。多世代間が交流する場があればおもしろい。
- 学生だけで立ち上げまでやるケースはほとんどない。しかしながら、数少ないそのような団体において、活動を単位認定することについて、既存メンバーが単位狙いの学生が参加してくることを嫌がったことがあった。このような骨のある学生もいる。

6 プロモーション戦略の強化

- 例えば学生祭典は、京都だからできる大きい規模の活動なので、プロモーションにもつながるのではないかと。入学者の受け入れ方針が個々の大学ごとに個性が強まっている中で、共同で何かプロモーションするとすればこのような取組だと思う。
- 北陸は京都へのニーズがあるはず。新幹線の影響で関東に行くことも増えているが、京都全体でがんばることができれば良いと思う。中部あたりは岐阜、愛知を飛ばして静岡が京都に関心を持っていると感じる。
- 北陸地域の電車で広報を行ったところ、北陸からの入学者が増えたことから、小京都の地域では京都に行きたいという思いがあるのではないかと。
- 北陸は大きなマーケットだが、数は減っている。新幹線の影響で関東に流れたかと思っていたが、そうでもなく、傾向としてまず近場で進学先を探す地元志向が強くなってきているようだ。
- 北陸の高校生が関東に行かないように大学コンソーシアム京都に頑張してほしい。
- 東京からは学生がたくさん入学してくるわけではないので、東京でプロモーションする位置づけはブランディングになる。
- 「京都」の影響は大きく、特に親御さん世代は京都に観光に来た際に関心を持たれることが多いだろう。
- 親御さんは子供が京都に進学することで、京都に宿ができるような感じで喜ぶようだ。また、女子からすると、大阪よりも京都の方に安心感があるようである。
- B&Sは良い取り組みだと思うので、これからも積極的に展開していただきたい。京都が「学生のまち」というイメージはおそらく高校生は持っていないが、修学旅行で京都に来て、京都に進学する高校生は多い。
- 学ぶためには、ある程度のゆったりとした雰囲気が必要であると思う。歴史的な部分も含めて、京都はまさにそのような学びに集中できる環境ではないかと。情報がどこでも容易に集められる現代において、体がどこにあるかは重要。
- 通信教育について、首都圏の富裕層が文化的なものを求めて受講することがあるらしい。スクーリングがあるので、「週末は京都」というような富裕層を取り込むチャンスがあるかもしれない。
- 京都で芸術を学びたいと考える学生の選択肢は多く、それぞれの大学が特徴を持っているので、大学コンソーシアム京都には京都に目を向けさせるよう頑張してほしい。
- 合同で広報しても大きい大学に流れてしまうのが現実。どうしても4年制大学向けの内容になってしまうので、短大をどう活性化させるか、基本的にはそれぞれの短大の問題なので、各短大が頑張らないといけないことだと思っている。
- 京都というまちの魅力にひかれて入学する学生もいるので、「大学のまち・学生のまち」という意識が世間に浸透すればありがたい。